

に送りて、西湖を占領し、更に一支隊を齋桑湖方面より出して、故城に進め、別働隊を喀什噶爾方向より送り、南北相呼應して新疆を蹂躪する有らば、其の結果果して如何ぞや。殊に新疆全土の戍兵僅に六千を越えず、而も脆弱恃むに足らず。想ふて是に至れば、吾人は新疆の運命に關して、喟然長大息せざるを得ず。

嘗て聞く英國陸軍大佐マークベル氏、北京を發して西北漠外に出で、親しく喀什噶爾附近山河の形勝を親察し、嘆じて曰く、『天山南北路が支那に屬するは迷ひなり。順當ならざるなり。支那の戍兵一變悉く歐洲式の訓練に熟し、且つ鐵道を陝西以西に連絡せしめたる曉に非ざれば、露國に對抗して其侵入を防止するは絶望なりと』試みに地形上より觀察すれば、新疆は清國に屬するよりは、寧ろ露國領土、耳機斯坦地方に附隨するの至當なるは、何人と雖も異議を挾むの餘地なかるべきのみならず、其の人種より論ずるも、言語、宗教より觀るも、將た風俗、習慣より察するも、耳機斯坦地方に酷似するを認む。加ふるに交通の關係、上及耳機斯坦地方との商業的經濟上の關係は、近時益々接近の度を増進し來り、地方の住民は、次第に露人と親み、却て清國に對して反抗せんとするの傾向あるより推論し來れば、新疆が